

## 絵図による植生景観復元の試み(2) —二ヶ領用水円筒分水の場合—

増 淵 和 夫\*<sup>1</sup>・藤 沢 正 一\*<sup>2</sup>・上 西 登 志 子\*<sup>2</sup>

A reconstruction of Vegetive landscape by Historical pictures at Entoubunsui,  
Nikaryou Yousui, Kawasaki, Central Japan

Kazuo MASUBUCHI, Syouichi FUJISAWA, Toshiko KAMINISHI

### I はじめに

増淵ほか(1994)は「江戸名所図会」や「陸軍迅速測図」などを用い、江戸時代末期から明治時代10年代(1810年頃から1880年頃)にかけての、川崎市多摩区枳形の新田緑地周辺の植生景観を復元した。植生景観の復元にあたっては、小椋(1983, 1986, 1989, 1990, 1992a, b, 1993)の方法に準拠している。復元された植生景観は、社寺周辺と丘陵谷戸縁辺部を除いて、高木の林は少なく、ササなどの草本類や低木類からなる植生高の低い植生である。高木の樹木はマツ(アカマツ)とされている。近世において、植生景観を復元するのに、小椋(1983, 1986, 1989, 1990, 1992a, b, 1993)の方法が極めて有効であることが、増淵ほか(1994)によって示されたと考えられる。そこでさらに植生景観の復元地域を拡大し、より広域的な視野を獲得するために、今回、生田緑地の東方川崎市高津区久地の二ヶ領用水円筒分水付近の植生景観の復元を試みた。

### II 方 法

増淵ほか(1994)と同様、小椋(1983, 1986, 1989, 1990, 1992a, b, 1993)の方法に準拠した方法を用いた。復元にあたっては「百草松蓮寺紀行」を主に用いた。

### III 「百草松蓮寺紀行」

文政十年(1827)、江戸の文人竹村立義が、多摩郡百草村の松蓮寺へ詣でた時の紀行文で、見聞内容に彩色のスケッチが添えられている。本稿では川崎市

市民ミュージアム所蔵の「百草松蓮寺紀行」を使用した。

生田緑地周辺のものとして「菅生松本弘福寺図」があり、久地円筒分水付近のものとして「久地村用水口並分量樋図」がある。

### IV 植生景観の復元

#### 1. 「江戸名所図会」との比較

久地円筒分水付近の植生景観の復元を検討する前に、「百草松蓮寺紀行」と「江戸名所図会」で同一の対象を描写している川崎市多摩区の広福寺周辺と長森稲荷の植生について検討する。

##### 1-a. 「江戸名所図会」

「江戸名所図会」では「韋駄天山廣福寺」(図2)として、広福寺境内、枳形山、北野神社周辺の景観が描写されている。

廣福寺境内には松、杉、桜、広葉樹タイプが、北野神社(韋駄天社)には松が多く、そのほか杉、広葉樹タイプ、桜が谷縁辺部に描き分けられている。図会中「枳形山」と記入された丘陵部には、丘陵頂部と尾根沿いに松タイプが僅かに描写され、斜面上には樹形の描写はなく図絵左の戸隠不動付近と思われる丘陵上の松タイプの植生と対照的である。

長森稲荷付近に関しては、「飯室山・長者穴・長森稲荷」(図3)がある。植生は長森稲荷境内には松、杉タイプ、沖積低地は水田が見られる。

##### 1-b. 「百草松蓮寺紀行」

「百草松蓮寺紀行」では、「菅生松本弘福寺図」(図4)として、「江戸名所図会」の「韋駄天山廣福寺」より、広い視野で二ヶ領用水から枳形山、広福寺周

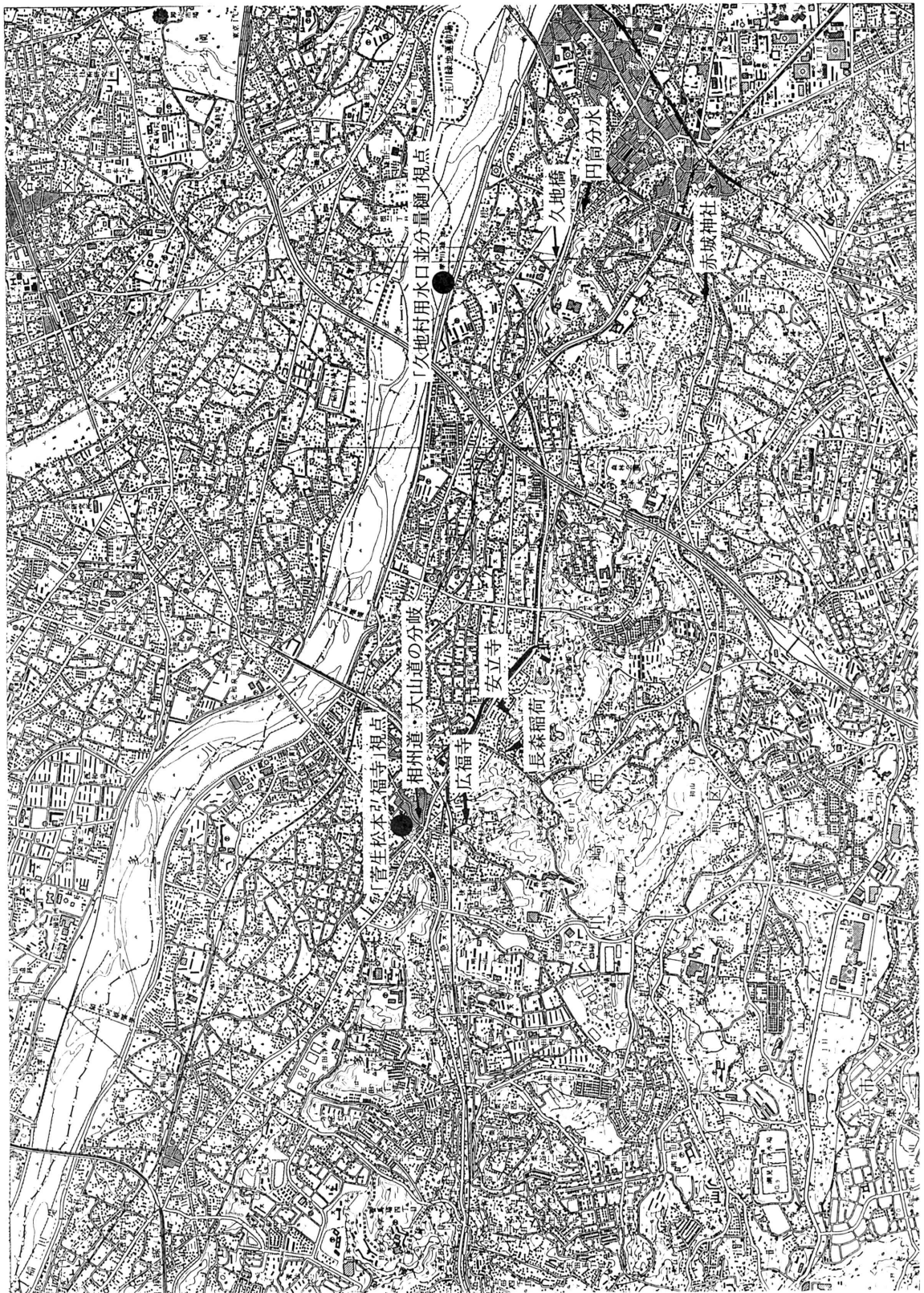


図1 絵図関連図と視点位置図（国土地理院発行の1/25,000地形図「溝の口」（H6）を使用）

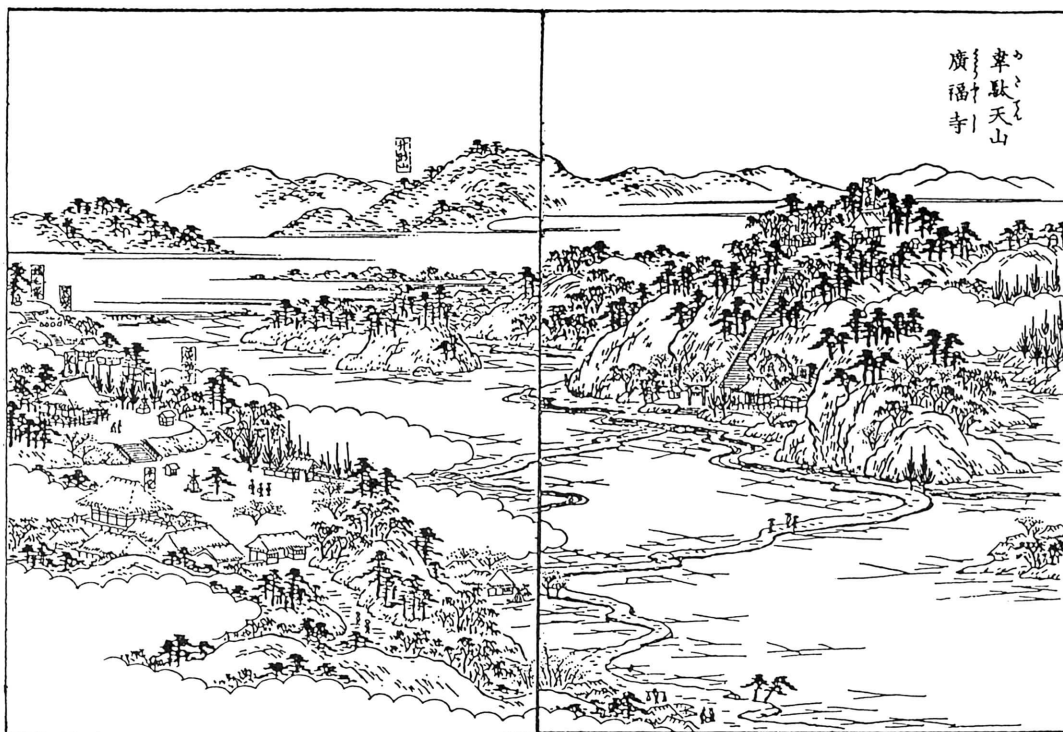


图2 江戸名所図会「韋駄天山・廣福寺」

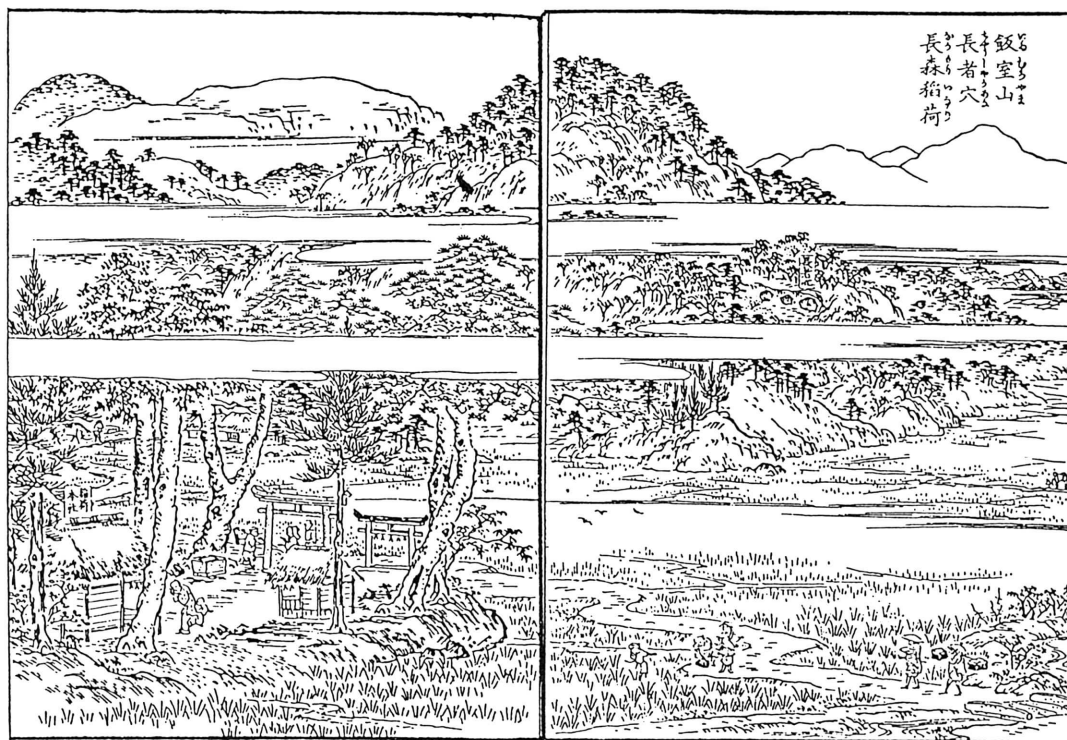


图3 江戸名所図会「飯室山・長者穴・長森稻荷」

辺の景観が描かれている。絵図から予想される視点の位置を図1に示す。絵図右下に二ヶ領用水が描写され、相州道（現、世田谷街道）と府中道（現、府中街道）との交差付近の多摩川低地に集落と樹木が描かれている。樹木は、いずれも緑の葉先の部分に焦げ茶の短い線が転々と重ねられていることから、落葉広葉樹と考えられる。同様の手法で描かれた落葉広葉樹は、他にもありこの絵図では、タイプ4ないし5の落葉広葉樹が描き分けられている（図4）。タイプ2の落葉広葉樹は、他に比べ樹皮が濃く描かれている。絵図左下の宿河原村付近には明らかにマツと思われる樹木が描かれている。現在も、宿河原船島稲荷神社やその上流中野島・和泉の多摩川左岸には松林がみられる。広福寺境内には、松タイプとタイプ4、5？の落葉広葉樹が描かれているが、「韋駄天山廣福寺」に比べると、植生の細かな描き分けは少なく、「韋駄天山廣福寺」に描かれている杉タイプの植生が欠如している。絵図左下中段から上段にかけては、現在の東生田1丁目に対比される丘脚と飯室山・枳形山が描写されている。現在の東生田1丁目に対比される丘脚上には位置的にみて、安立寺

と思われる寺が描かれている。安立寺付近の尾根から沖積低地部分にかけては松タイプの植生がまばらに描かれ、所々に所にタイプ4の落葉広葉樹がある。この沖積低地部分が、「飯室山・長者穴・長森稲荷」の長森稲荷に最も近い。飯室山・枳形山付近の尾根部には疎らな松タイプとタイプ4落葉広葉樹がある。絵図全体の丘陵斜面は薄緑に彩色され、植生高の高い植生があったという印象はあたえられない。

図1に示した視点からの、飯室山・枳形山付近の丘陵稜線予想線を作図・計算から求めた（図5）。丘陵予想線と絵図の飯室山－枳形山の稜線はよく一致する。

従って、「江戸名所図会」に比べ、植生の細かな描写には欠如するが、「百草松蓮寺紀行」の安立寺付近から、飯室山－枳形山－広福寺の植生景観は、「江戸名所図会」の植生景観と矛盾しないと考えられる。すでに、増淵ほか（1994）によって、「江戸名所図会」の写実性の高さは明らかとなっていることから、このことは、「百草松蓮寺紀行」の写実性の高さを示す。

## 2. 久地二ヶ領用水円筒分水付近の植生景観の復元

生田緑地の東方に伸びた多摩丘陵は、多摩区五所

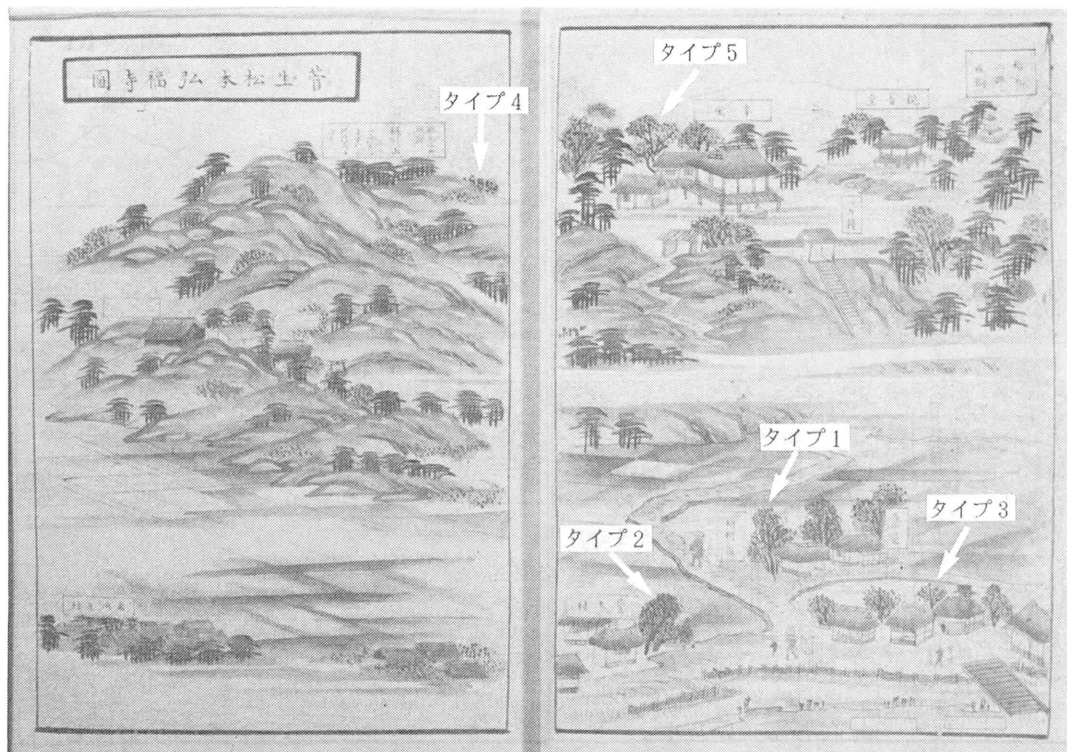


図4 百草松蓮寺紀行「菅生松本弘福寺図」

塚付近から高度を減じて、下末吉台地に変わる。JR南武線の久地駅から溝口駅の北側には、残丘状の下末吉台地が見られる。「百草松蓮寺紀行」の「久地村用水口並分量樋図」は、この下末吉台地とその北側の沖積低地を描写している(図6)。円筒分水は久地村の分量樋として、耕作面積に比例して、溝ノ口堀、小杉堀、川崎堀、根方堀の4口に分かれる。慶長16年(1611年)の二ヶ領用水建設時に設けられたと考えられる。昭和16年(1941年)にコンクリート造りの現在の姿になった。視点を図1に示す。

絵図右中段から、絵図左下段にかけて二ヶ領用水が屈曲しながら流下している。絵図右中段の橋は、現在の久地橋に対比される。久地橋付近から二ヶ領用水に直角に多摩川方向に半島状に伸びる微高地は、江戸時代元禄の頃に築かれたという「ヨコドテ」と思われる。「ヨコドテ」の上にはサンヤ川が二ヶ領用水から分流している。久地橋とサンヤ川の間には、大入樋がある。「ヨコドテ」は多摩川の洪水から下流の村を守るために作られたが、この堤防によって逆に上流の水害が増すために、死者も出るほどの反対運動が起こり、建設は途中で中止となったという。この未完の「ヨコドテ」は、現在も残存している。

大入樋は寛永2年(1625年)に作られたと言われているが、現在は存在していない。「ヨコドテ」上の低地との間に流れる川は、水量調節のために設けられたサンヤ川であるが、現在は埋められている。昭和17年の川崎市発行3000分の1の地形図には記載されている。

二ヶ領用水の屈曲の様子や、円筒分水、「ヨコドテ」、大入樋、サンヤ川などの描写は極めて写実性が高い。

「ヨコドテ」上には松タイプがあり、その上流側の低地は、草地(畑)と思われる。低地を丸く取り囲むように樹木が描写されている。樹形は丸く、葉先に伸びる枝がないことから、常緑樹タイプと考えられる。川崎市宮前区平在住の山田国太郎氏からの聞き取りによれば、1930年代この付近の沖積低地では、シラカシを防風林として植栽していたという。二ヶ領用水に面する台地斜面は、急勾配で、細かく小さな谷が切れ込んでいるように描写されているが、現在も絵図の通りである。台地上は全体として、緑で彩色され、植生高は低い印象を与える。久地橋付近の台地上は所々にタイプ4の落葉広葉樹がみられる。タイプ4の落葉広葉樹は、樹形からするとクヌギ、コナラが推定されるが断定はできない。円筒分水付近の台地上には、尾根部に松タイプと谷沿いにタイプ3の落葉広葉樹が、疎らに描写されている。タイプ3の落葉広葉樹は、谷沿いにあることから、ケヤキの可能性が考えられる。絵図左中段は霞がかかり、上段に「赤城社」とある。「赤城社」周辺の植生は、疎らな松タイプとタイプ3の落葉広葉樹である。絵図の視点からは、台地そのものに視野が妨げられ、台地の南方向は実際には見渡せない。しかし、霞できられていることから、部分的に鳥瞰図法を用いたとすれば、上作延の赤城神社に「赤城社」は対比される。方向は一致する。

図1の視点からの稜線予想線を図7に示す。稜線

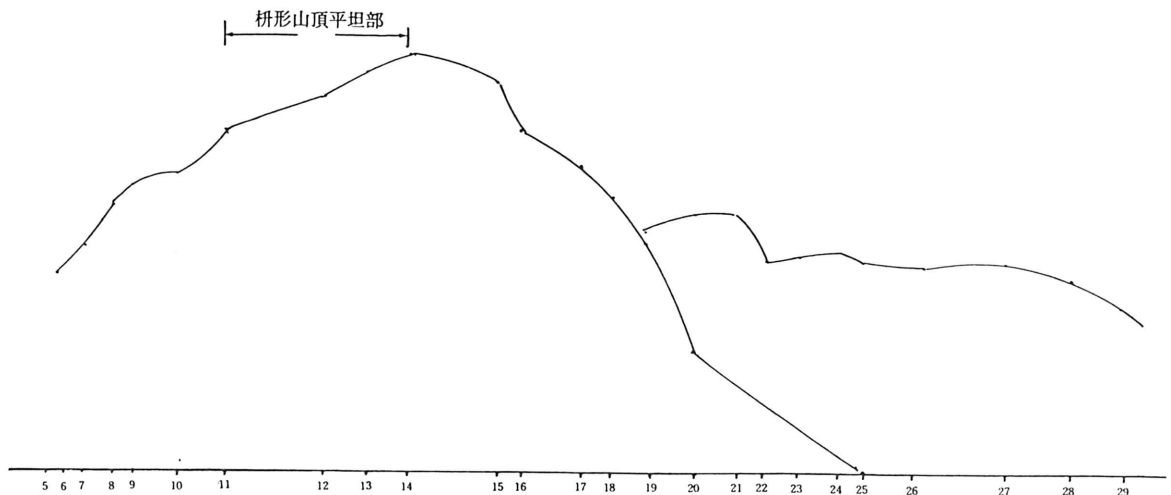


図5 丘陵線予想線「菅生松本弘福寺図」

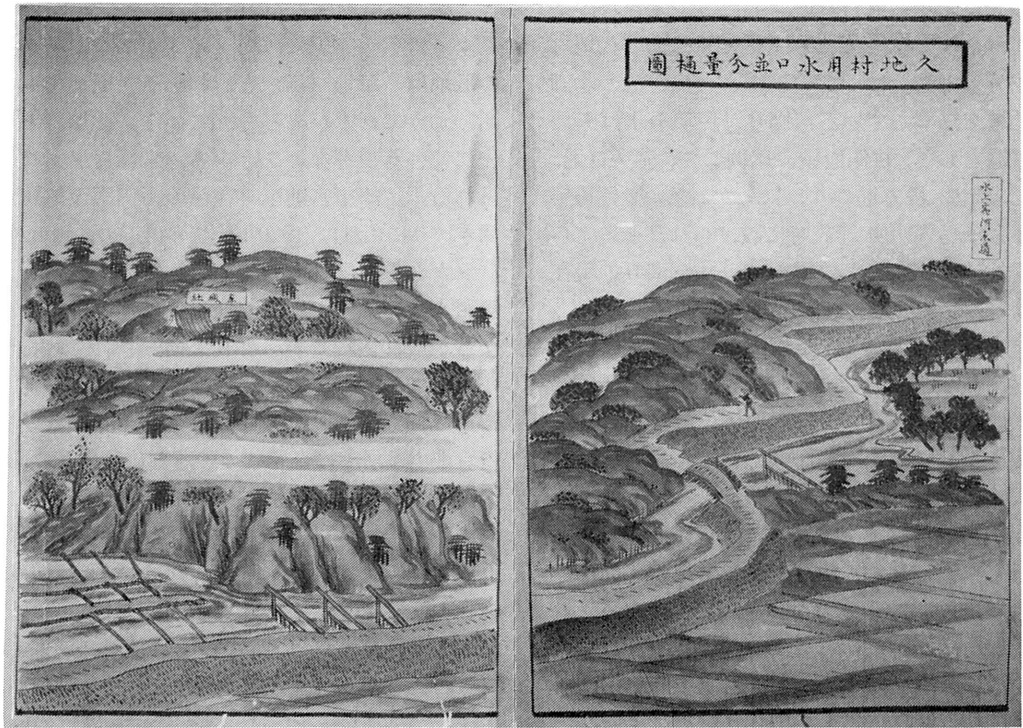


図6 百草松蓮寺紀行「久地村用水口並分量樋図」

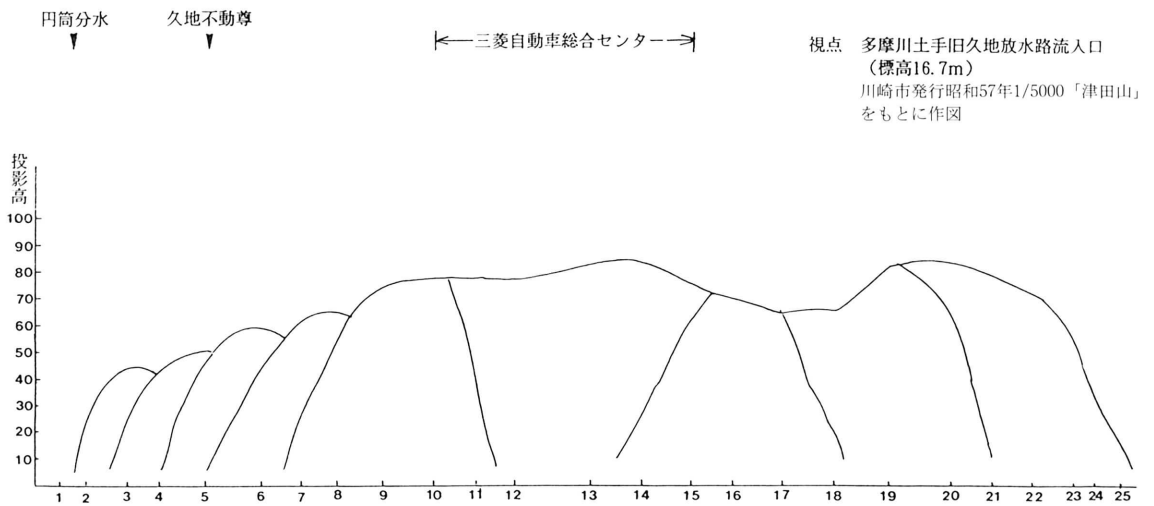


図7 稜線予想図「久地村用水口並分量樋図」



図8 「久地村用水口並分量樋」 陵線予想作図

予想線は、絵図の久地橋上流の「歩く人」付近の台地でよく一致する。従って、「久地村用水口並分量樋図」においても、絵図の写実性は高いと考えられる。

なお、明治14年（1881年）の陸軍迅速測図「神奈川県武蔵国橋樹郡溝口」における本台地の植生は、台地南東斜面の一部に松、台地頂部は畑となっており、他には植生の記載はない。

以上から、1827年頃の二ヶ領用水円筒分水付近の沖積低地には田と、草地（畑）の周りには常緑樹が、「ヨコドテ」上には松タイプの植生があったと考えられる。台地のほとんどは、全体として、植生高の低い植生からなり、落葉広葉樹や松が点在し、急傾斜の沢沿いにはケヤキと思われる落葉広葉樹が生育していたと考えられる。このような植生景観は、本台地が萌芽再生による雑木林としてでなく、薪炭林として利用されていた事を示唆すると考えられる。

## 摘 要

増淵ほか（1994）に続いて、沖積低地に接する下末吉台地・川崎市高津区久地二ヶ領用水円筒分水付近の絵図「百草松蓮寺紀行」による植生景観の復元を試みた。

1827年頃の久地二ヶ領用水円筒分水付近は、高木の林はなく、低い植生で覆われ、松や落葉広葉樹が点在する植生であったと思われる。これはほぼ増淵ほか（1994）によって復元された生田緑地周辺の植生景観と類似するものであり、薪炭林として利用されていたと考えられる。

## 謝 辞

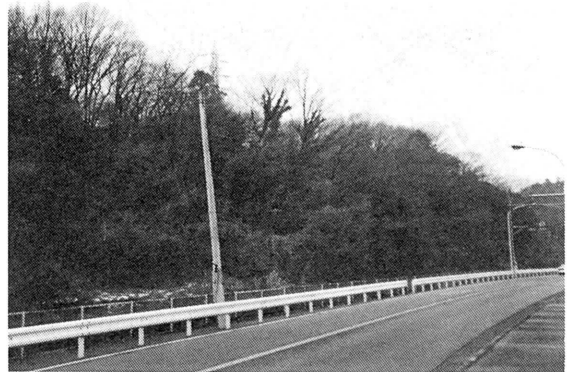
川崎市市民ミュージアム財団法人芸員望月一樹氏には、「百草松蓮寺紀行」の閲覧、写真撮影でお世話になった。深謝致します。

## 引用文献

- ・小椋純一（1983）名所図会に見た江戸後期の京都周辺林。京都芸術短期大学「瓜生」(5)：18-40。
- ・小椋純一（1986）洛中洛外図の時代における京都周辺林―「洛外図」の資料性の検討を中心にして。国立歴史民俗博物館研究報告(III)：81-105。
- ・小椋純一（1989）K絵画資料の考察からみた文化年間における京都周辺山地の植生。造園雑誌（52）：5、37-42。
- ・小椋純一（1990）京都近郊山地の植生史―絵図によ

る近世の植生復元を中心にして。植生史研究(5)：39-47。

- ・小椋純一（1992a）絵図からみた京都近郊の植生復元と改変。第7回植生史研究会シンポジウム講演要旨。
- ・小椋純一（1992b）絵図から読み解く人と景観の歴史。雄山閣。238pp。
- ・小椋純一（1993）迅速図の植生記号概念に関する研究。京都精華大学紀要(5)：40-69。
- ・増淵和夫・藤澤正一・竹井久男・上西登志子（1994）絵図による植生景観復元の試み―生田緑地の場合―。川崎市青少年科学館紀要(5)：1-23。



久地～円筒分水間の現在の台地北側バス停「久地」付近



久地～円筒分水間の現在の台地北側